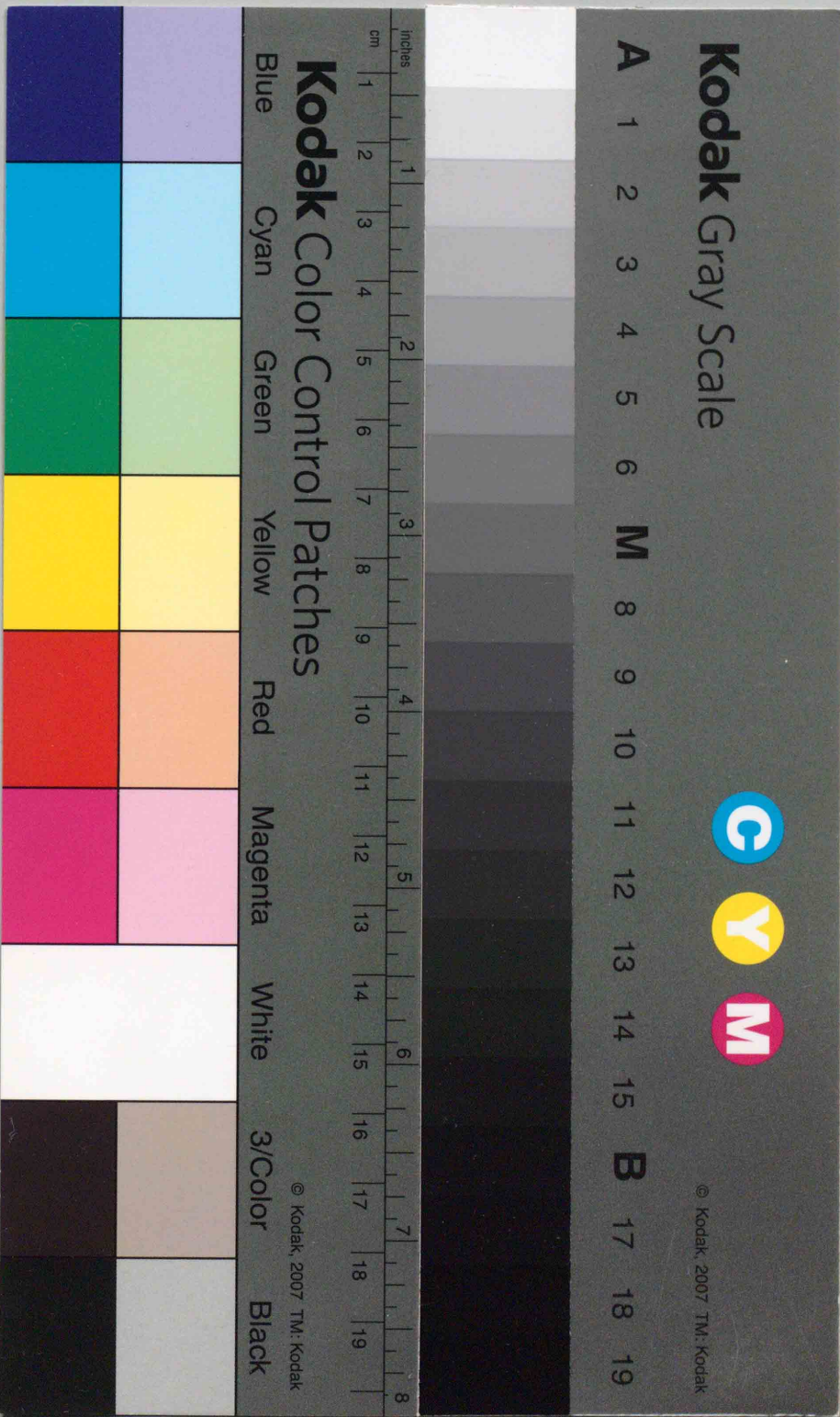


頭註
方丈記讀本

4a
810
大15



41648

教科書文庫

4
810
41-1926
20000 67670

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM. Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM. Kodak

42
810
大15

資料室

修文館編輯部編



頭註
方丈記讀本



東京修文館發兌

方丈記解題

方丈記は鴨長明が年シゴ來見たり聞いたりしたことを書いたもので
順徳天皇の御代皇紀一八七二年の作である。

長明は長繼の子で家は代々山城國加茂社の禰宜であつたが長明
の代になつて父の後をついで禰宜に成りたいと願ひ出たが許され
なかつたので憤慨して出家して蓮胤と號して大原の里に隱退した。
その後のことや此の書の題號の由來は本文を讀めばよくわかり
ますが方丈記といふ書名は日野山の閑居の廣さ方丈で有つたこと
から出來たのである。

長明は和歌も上手で有つたので、後鳥羽天皇の御時に和歌所の寄

人となつてゐたこともあります。その作は勅撰集に澤山はいつてゐます。歌集は博文館の日本歌學全書第七編に收められて有ります。外に著作では瑩玉集無名抄發心集文字鏤四季物語等有ります。

例言

- 一、本書は中等學校用副讀本として編纂しました。
- 一、頭註は成るだけ簡單にしました。餘り詳しいのは却つて取扱ひにくいと存じまして、
- 一、生徒に此の程度の豫習をさせて置くと大變教授がし易いと存じます。生徒も何れの學科も豫習せねばならないから、是れだけ註が有れば字引をひいて書込む時間が省けて大變助かると存じます。
- 一、本書の教授が終つた後その概括として、題號の由來著者の思想、その批判等を書かせると思ふがまとまつてよいと思ひます。
- 一、奥の附録の重要語句は是非諳記させたいと思つて、切りはなせば

カードとなる様にしておきました。

頭註
方丈記讀本

目次

一	發端	一
二	安元の大火	三
三	治承の辻風	五
四	福原の遷都	六
五	新都	八
六	養和の飢饉	一〇
七	養和の疫病	一三
八	元暦の大地震	一五

九 無常觀……………一六

一〇 大原の閑居……………二〇

一一 日野山の菴……………二三

一二 日野山の仙境……………二四

一三 日野山の逍遙……………二六

一四 日野山の花月……………三〇

一五 日野山の浮雲……………三三

一六 西山の斜月……………三四

論語子罕篇
子曰逝者如斯
夫不舍晝
夜

藤原公任
かこに消え
かしの泡に結ぶ
水に消え身を
にめぐる身に
こそありけれ

逝行往
淀澗
且旦
亦又復
書畫盡

- 1 川の水はいつも流れてゐるけれども、どいもこの水ではない。
- 2 水だまり。
- 3 水のあわ。
- 4 或は消え。
- 5 これと同じことである。
- 6 玉をしいたやうに美しい(枕こさば)
- 7 瓦。
- 8 澤山立ち並んでゐる。
- 9 いつの代までも變らないのか、さよよく探つて見ること

方丈記

頭方丈記讀本

鴨長明 著
奥井嶺南 註

一發端

逝く川の流れば絶えずしてしかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と住家と亦此の如し。玉敷の都の中に棟を並べ、藁を争へる尊き卑しき人の住居は、代々を経て盡きせぬものなれど、是をま

亡一滅
後漢書
思其人至
其鄉其所存
其人亡

崩一薨一死

賀一喜一慶一

無常
生滅輪廻謂之
無常
何か思ふ何か
は只朝顔の中
の上の露の花

猶一尚

10 下に上につけるもの
を上に置いた
ひ方である
例えは
行け、益夫...
来よ、我が子よ
...
のやうに歌等に
はよくあるいひ
方である
13 11 此の世のこころ
まるで競争する
やうに、忽ち無
くなつてしまふ
こと
14 人情や世間のこ
ころになつてから

ことかと尋ねれば昔有りし家は稀なり。或は去年焼
け、今年は作り、或は大家亡びて小家となる。住む人も
是に同じ。處も變らず。人も多かれど、古へ見し人は
二三十人が中に僅に一人二人なり。朝に死し夕に生
るゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。知らず生れ死
ぬる人、いつ方より來りて、何方へか去る。又知らず、假
の宿、誰が爲にか心を惱し、何によりてか目を悦ばしむ
る。其主人と住家と無常を争ひ去る様いは、朝顔の
露に異ならず。或は露落ちて花残り。残るといへど
も朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露猶消えず。消え
ずといへども、夕を待つ事なし。凡物の心を知れりしよ

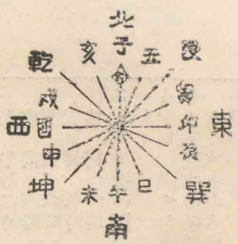
戊一戌一戊一
乾一幹
疾一病

1 午...で有つたか
2 午...で今の午後
3 午...で今の午後
4 午...で今の午後
5 午...で今の午後
15 一年のいひ

り以來四十あまりの春秋を送れる間に世の不思議を
見ることや、度々になりぬ。

二 安元の大火

去にし安元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹き
て靜ならざりし夜、戌の時は、都の巽より火出で來
りて、乾に至る。はてには朱雀門大極殿、大學寮、民部省ま
で移りて、一夜の程に塵灰となりにき。火本は樋口富小
路とかや、病人を宿せる假家より、出で來りけるとなん。
吹き迷ふ風に、とかく移り行くほどに、扇をひろげたる
が如く末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近き家は只

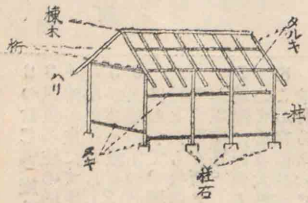


營作 榮造
 煙 吹 煙
 堪 勘 誌
 1716 珊瑚七珍 15 14131211
 無數 珊瑚、瑪瑙、琥珀、玻璃、金、銀
 ハテシカナイ。 三位以上の貴人
 6 次第に燃えひろ
 7 そればかり一
 8 ち生きている心持
 9 煙に巻かれて、
 10 道を失ふこと
 11 どうやらこころや
 12 多くの寶
 13 灰やほえさし
 14 しのばないよ
 15 三位以上の貴人

管^{スラ}焰^{ホノホ}を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、
 火の光に映じて、普く紅なる中に風に堪へず、吹き切ら
 れたる焰飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ、移り行
 く。その中の人現心あらんや。或は煙にむせびて倒れ伏
 し。或は焰にまぐれて、忽ちに死ぬ。或は又僅かに身一つ、
 辛くして遁れたれども、資財を取り出るに及ばず。七珍¹¹
 萬寶¹²さながら灰燼¹³となりなき。其費¹⁴いくそばくぞ。この
 たび公卿の家十六焼けたり。況して其外は數¹⁶を知らず。
 すべて都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの
 數千人。馬牛の類、邊際¹⁷を知らず。人の營¹⁸み皆愚なる中に
 さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し心を悩ます¹⁹

201918
 らかそ人のするこは
 らなくべつ、つま
 らないことであ

同 廻
 起 越 赴
 陸 1 四月
 如 月 ム ツ キ
 皇 生 ヤ ヨ ヒ
 無 月 ツ キ
 水 無 月 ツ キ
 葉 月 ハ ツ キ
 文 月 ナ ツ キ
 長 月 ナ ツ キ
 神 無 月 ツ キ
 霜 走 月 シ ヲ ス
 師 走 月 シ ヲ ス
 五月 三月
 六月 七月
 八月 九月
 十月 十一月
 十二月



三 治承の辻風

ことは、勝²⁰れてあぢきなくぞ侍るべき。

又治承四年^{高倉天皇(八四〇)}卯月廿九日のころ、中御門京極のほどよ
 り大なる辻風²起りて六條わたりにまで嚴しく吹きける
 こと侍りき。三四町をかけて、吹き廻るまゝに、その中に
 籠^{コモ}れる家ども、大なるも小^チさきも、一つとして破れざる
 はなし。さながら平^{ヒラ}に倒れたるもあり、桁柱^{ツクハ}ばかり残れ
 るもあり。又門の上を吹き放ちて四五町がほどに置き、
 又垣を吹き拂ひて、鄰と一つになせり。況や家の内の寶
 數を盡して空にあがり、檜皮^{ヒノヒ}茸^{シロ}板^{イタ}の類、冬の木の葉の風

全 全 同	嘆 歎	損 聞 鳴 捐 聽 鳴 覽 視 觀	葦 葦	見 見 覽 視 觀	鳴 鳴 覽 視 觀	損 損 聞 聞 鳴 鳴 捐 捐 聽 聽 鳴 鳴 覽 覽 視 視 觀 觀	2 1 都 を う つ す こ こ ら ぬ こ と で あ つ た。	12 前 事 の お こ る か ら う か な ど こ こ ら ぬ こ と で あ つ た。	11 普 通 の こ と で は な い。	10 こ の こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。	9 か た わ わ 不 具 者 の こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。	8 こ の こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。	7 地 獄 の 像 に あ ら ぬ こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。	6 犯 した あ ら ぬ こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。	5 大 地 の つ つ さ を あ ら ぬ こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。	4 樹 の 皮 に あ ら ぬ こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。	3 つ む じ 風 の 柱 の 横 木 に あ ら ぬ こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。
-------------	--------	---	--------	-----------------------	-----------------------	--	--	---	--	---	--	--	--	--	--	---	---

に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹き立てたれば。すべて目も見えず。夥しく鳴り動む音に、物いふ聲も聞えず。地獄の業風なりとも、かばかりにとぞ覺えける。家の損亡せるのみならず、これを取り繕ふ間に身を害ひて、片羽づけるもの數を知らず。此風未申の方に移り行きて、多くの人の歎をなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝることやはあるたゞ事にあらず。さるべき物のさとしかなとぞ疑ひ侍りし。

四 福原の遷都

又同年の水無月の頃、俄に都遷侍りき。いと思ひの外

苑 鳥 畑 圃	唯 誰	陰 誰	つ く は の か の れ の こ と に こ し ま す か け は な に と	13 皆 馬 に の る や う な つ た。	12 牛 車 に 乗 る べ き に な つ た。	11 武 士 の 行 ひ が 重 な い 人 の 行 ひ が 重 な い 人 の 行 ひ が 重 な い	10 世 に 用 ひ ら れ な い 人 の 行 ひ が 重 な い	9 主 君 の 世 話 に な ら ぬ 人 の 行 ひ が 重 な い	8 官 位 を 望 ん で あ ら ぬ 人 の 行 ひ が 重 な い	7 天 子 の 行 ひ が 重 な い	6 さ し か し よ し あ ら ぬ こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。	5 大 道 の 心 配 の こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。	4 別 に な ら ぬ こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。	3 恒 武 天 皇 の 延 暦 十 三 年 に 都 を 遷 す こ と は 有 る ま た な ら ぬ こ と で あ つ た。
------------------	--------	--------	---	---	--	---	--	--	--	--	---	--	---	---

なりし事なり大方この京の初めを聞けば、嗟哉天皇の御時、都と定りにけるより後、既に數百歳を経たり、異なる故なくて、容易く改るべくもあらねば、これを世の人容易からず愁ひあへる様、理にも過ぎたり。されどかくいふかひなくて、御門より始め奉りて、大臣、公卿、悉く攝津、國難波の京に遷り給ひぬ。世に仕ふる程の人誰か一人故郷に残り居らん。官位に思ひをかけ、主君の蔭を頼む程の人は一日なりとも、疾く移らんと勵みあへり。時を失ひ、世にあまされて、期する所なき者は憂ひながら留り居り、軒を争ひし人の住居、日を経つゝ荒れ行き、家は毀たれて淀川に浮び、地は目の前に島となる。人の心

至一 峽に到
狭一 拾芥
條一 從北行
南一 起從西
殿一 倉天智天皇
朝一 倉天智天皇
名一 倉天智天皇
つば名にや木智天皇
が子行くはを誰しれ

14 平氏の領土は西
都に多く、近
から平氏に
非らず、人
當時の有様
くわある。武
私地は多く源
東有地、人など
士や貴人など
權を多くたつ
自領地であつた
都の程は合地
の廣さ、程は
町區を立てる
に、都の程は合
南に條をささげ
東に條をささげ
天皇の御倉
齊る所、三韓
を征伐せられた
時、筑前、筑後
山に丸木を假
所を建て、假
つた。なつかし
かつた。なつか
も優美な御

皆改まりて馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。
西南海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。

五新都

其の時、おのづから事のたよりありて、攝津國今の京
に到れり。所のありさまを見るに、其の地ほど狭くて條
理を割るに足らず。北は山に傍ひて高く、南は海に近く
て下れり。浪の音常にかまびすしくて、汐風殊に烈しく、
内裏は山の中なれば、かの木丸殿もかくやと、中々様か
はりて、優なるかたも侍りき。日々に毀ちて、川もせきあ
へず、運び下す家は、いづくに作れるにかあらん。猶空し

着著

復歸還返
傳傳

9 さすがに廣い淀
川も材木で塞ぐ
らひだ。通れぬ
10 あき地。
11 あらゆる人々は
皆、おちつかぬ
12 心のおちつかぬ
13 普請のころ。
14 公家の正服で、
冠と袍と指貫と
15 紋のない狩衣の
下で、六位以下
の人の官服で
あつた。
1716 武家の服。
18 田舎ものらしい
19 前兆（まへしら
20 はつきり）（そ
21 運び移した。
22 ぼんやりと聞き
覺えてゐますが

き地は多く、造れる屋は少し。故郷は既に荒れて新都は
未だ成らずありとしある人は、皆浮雲の思ひをなせり。
もとより此の所に居れるものは、地を失ひて愁へ、今移
り住む人は土木の煩ひあることを歎く。道の邊を見れ
ば車に乗るべきは、馬に乗り、衣冠布衣なるべきは、多く
直垂を着たり。都のてぶり忽ちに、改まりて、唯鄙びたる
武士に異ならず。是は世の亂るる瑞相とか、聞きおける
もしるく、日を経つつ、世の中浮き立ちて人の心も治ら
ず。民の愁遂に空しからざりければ、同年の冬、猶この京
に還り給ひにき。されど毀ちわたせりし家どもは、いか
になりけるにか、悉く本のやうにも作らず。ほのかに傳

免許

23 古の賢い天子の御代には、
24 茅のさきをきり
25 仁徳天皇のこと

26 比へて。

頃項

饑飢 饑饉

種植 樹栽

1 五穀買らず人々のうえること。
2 あまれば、粟、黍、麥、豆、粟
3 黍、麥、豆、粟
4 むだに。
5 仕事を世話しくする。

六 養和の飢饉

安徳天皇の元年(八四二)

又養和の頃かとよ久しくなりて慥にも覺えず。二年が間世の中飢渴してあさましきこと侍りき。或は春夏日てり或は秋冬大風大水などよからぬ事ども打ち續きて五穀悉く實らず空しく春耕し、夏植うる營のみあ

捨棄

効験

6 さわざ。

7 一通りでない有りかた法。

8 一向そのききめがない。

9 田舎が富み榮える都も富んで來るので田舎を根本の原因としてたのみとしてゐる。

10 そんなに體裁もはつて居れないので。

11 大變愁へ歎きつ

12 目をつけて見て買はふとする人

13 こじき。

りて秋刈り冬收むる、ぞめきはなし。是によりて、國々の民、或は地を捨て、堺を出で、或は家を忘れて山に住む。さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にその効なし。京の習慣、何わざにつけても皆、もとは田舎をこそ頼めるに、絶えて上る者なければ、¹⁰ 皆、もとは田舎をこそ頼めるに、絶えて上る者なければ、¹⁰ さのみやは操もつくりあへん。念じわびつゝ、さまざまの寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目みたつる人もなし。たまたま交ふるものは金を軽くし粟を重くす。乞食道の邊に多く愁ひ悲ぶ聲耳に滿てり。

香一匂
道一途
則一即一乃

- 1 はやり病。
- 2 どうやら
- 3 景氣が恢復する
- 4 其の上。
- 5 悪しきはやり病
- 6 去年より一層
- 7 御祈禱の驗など
- 8 日増しに世が終
- 9 減りて魚の命
- 10 減りて魚の命
- 11 大層困つて恥も
- 12 外聞もかまはぬ
- 13 土にて築き上げ
- 14 塀。
- 15 見るに忍びない

七 養和の疫病¹

前の年此の如く、辛くして暮れぬ。^(養和二年) 明くる年は立ちな
 ほるべきかと思ふ程に、あまさへ、えやみうちそひて、ま
 さるやうに跡方なし。世の人皆飢え死にければ、日を経
 つ、窮まり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はて
 には笠うち着、足ひきつつみ、よろしき姿したる者、只管
 と見れば、則ち斃れ伏しぬ。築地のつら、路の頭に飢ゑ死
 ぬる類數も知らず。取り捨つるわざもなければ、臭き香、
 世界にみちみちて、變り行く、かたちありさま、目も當て

賤一錢
會一遭
遇一逢

- 14 身分賤しき田舎
- 15 樵夫キコリ
- 16 人たる人もない
- 17 不都合な、けし
- 18 赤い繪ノ具。
- 19 銀。
- 20 金屬をうすく打
- 21 ちのばしたるもの
- 22 如何にもすべき
- 23 方法のないもの
- 24 道具。
- 25 人の心にこり
- 26 是てた世。
- 27 こんななきけな
- 28 見捨てるれぬ夫
- 29 や妻のあるもの
- 30 愛の深い方か必
- 31 ず先き死ね。
- 32 小さい子。

られぬ事多かり。況や川原などには、馬車の行きちがふ
 道だにもなし。¹⁴ あやしき賤山¹⁵ かつも力盡きて、薪さへ乏
 しくなりゆけば、頼む方なき人は、自ら家を毀ちて、市に
 出でて之を賣るに、一人が持ちて出でたる價、猶一日が
 命を支ふるにだに及ばずとぞ。¹⁷ あやしき事は、斯る薪の
 中¹⁸ に丹づき、白金¹⁹ 黄金²⁰ の箔など、所所につきて見ゆる木
 のわれあひまじれり。之を尋ねれば、²¹ すべき方なき者の
 古寺に到りて、佛を盗み、堂の物の具を破り取りて、割り
 碎けるなりけり。²³ 濁惡の世にしも生れ遭ひて、斯る心う
 きわざをなん見侍りし。又いとあはれなる事侍りき。²⁵
 り難き女男など持ちたる者は、その思ひまさりて深き

予我
一吾
一余

母
一母

縁
一縁

28 山城にあり、光孝天皇のお建てになつた寺。
29 僧の第一の位である。次々こあげる。ホウイン、ホウゲン、ホウケウ、法印、法眼、法橋

30 徳の高い僧。相談して。

32 刊さいふ梵字でこの字をひたひたに書いて引導わたりしたてである。
33 成佛させること

は必ず先立ちて死ぬ。その故は我身をば次になして男にもあれ、女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たま／＼乞ひ得たる物を、先づ譲るによりてなり。されば親子あるものは、定まれる習ひにて親ぞ先立ちて死にける。又母が命盡きて臥せるを知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひ附きつつ臥せるなどもありけり。仁和寺に、慈尊院の隆曉法印といふ人、斯くしつ々数知らず死ぬることを悲みて、聖を數多かたらひつつ、其の首の見ゆるごとに額に阿の字を書きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける。其の人数を知らんとて四五兩月が程、數へたりければ京の中、一條より南、九條より北京よ

34 京都附近の田舎をさす。

35 まして……はどうして……できやうか。

36 畿内、東海道、東山道、北陸道、南陽道、山陰道、山陽道、西海道

37 稀有さいふこと

1 なみ／＼てはな

りは西、朱雀よりは東道の邊にある頭、すべて四萬二千三百餘なんありける。況んや、其の前後に死ぬるものも多く、川原、白川、西の京、もろ／＼の邊地などを加へて云は、際限もあるべからず、いかにいはんや諸國七道をや。近くは崇徳院の御位るとき、長承のころかとよ。かかる例は有りけりと聞けど、其の世のありさまは知らず。まのあたり、いとめづらかに悲しかりしことなり。

八 元暦の大地震

又、元暦二年のころ、大地震ふること侍りき。其の様、世の常ならず。山は崩れて川をうつみ、海はかたぶきて、陸

渚一汀

2 水中に入る。ぬれる。
 3 波打ちぎは。とまつてゐない。
 4 足か一所に立ちこさ。
 5 堂は大きな家、塔は普通の家、所は佛を安置する所。
 6 廟は祖先をまつる所。
 7 この時代から使ひかけた語法で今日のことになった。
 8 地震のため、さうだ。
 9 世の中は恐ろしい。
 10 世の中は恐ろしい。
 11 世の中は恐ろしい。
 12 世の中は恐ろしい。
 13 世の中は恐ろしい。
 14 世の中は恐ろしい。
 15 世の中は恐ろしい。
 16 世の中は恐ろしい。
 17 世の中は恐ろしい。
 18 世の中は恐ろしい。
 19 世の中は恐ろしい。
 20 世の中は恐ろしい。
 21 世の中は恐ろしい。
 22 世の中は恐ろしい。
 23 世の中は恐ろしい。
 24 世の中は恐ろしい。
 25 世の中は恐ろしい。

はひたせり。土裂けて、水湧きあがり、巖割れて谷にまろび入り、渚漕ぐ船は波にただよひ、道行く駒は足の立どをまどわせり。況んや都の邊には、在々、所々、堂舎塔廟、一として全からず、或は崩れ、或は倒れたる間、塵灰立ち上りて、盛んなる煙の如し。地の震ひ、家のやぶるる音、雷に異ならず。家の中に居れば忽ちうちひしげなんとす。走り出づれば、又地われさく。羽なければ空へも揚るべからず。龍ならねば雲にものぼらんこと難し。おそれの中に恐るべかりけるは、ただ地震なりけりとぞ、覺え侍りし。その中に、或る武士の、ひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、ついちのおほひの下に小家をつくりて、は

恥一辱

15 さりさめもない
 16 つまらないこと
 17 今迄の姿なく
 18 つぶされて
 19 氣の毒で
 20 道理至極
 21 大層
 22 小さい地震か
 23 地震と地震との間が、遠くなる
 24 一日おきに、隔日に
 25 地水火風

かなげなる跡なし事をして、遊び侍りしが、俄に崩れ埋められて、あとかたなく、平にうちひさがれて、二つの目など、一寸ばかり、うち出されたるを父母抱へて聲も惜まず悲みあひて侍りしこそ、あはれに、悲しく見侍りしか。子の悲には猛き者も恥を忘れけりと覺えて、いとほしく理かなとぞ見侍りし。かく夥しく震ふことは暫しにて止みにしが、その餘波しばく、絶えず。世の常に驚くほどの地震二三十度ふらぬ日はなし。十日廿日過ぎにしかば、やうく間遠になりて、或は四五度、二三次も、しは一日ませ二三日に一度など、大方そのなごり三月ばかりや侍りけん。四大種の中に水火風は常に害をな

26 ころの漢文句調

1 頭のこころ

2 大變なこころも有つたけれど

3 及ばない

4 なさけない

5 名譽や利益をむさぼる心

6 世の中さいふも暮して居れないさうだ

7 身分

せど、大地に至りては殊なる變をなさず。

九無常觀

(文德天皇の朝)

むかし齋衡の頃かとよ。大なるふりて東大寺の佛のみぐし落ちなどして、いみじきことども侍りけれど、猶このたびには如かずとぞ。すなはち人皆あぢきなきことを述べて、いささか心の濁もうすらぐかと見しほどに、月日かさなり、年越えしかば、後は、言の葉にかけて、いひ出づる人だになし。すべて世のありにくき事我が身と住家との、はかなく、あだなるさま、又此の如し。況んや所により身の程にしたがひて心を惱ますことは、あげ

泣一啼一鳴

貧一食一負

9 身分が賤しくて、人に入られぬ世

10 高位高官の威勢

11 大へん喜ばしい

12 一擧一動、喜ぶ

13 出来ぬ

14 みすばらしい

15 下へ

16 横柄な、人を見

17 見るとの聞くも

18 少しいの間も

2019 火災。片田舎

21 都への往復

て數ふべからず。若し自ら、身かなはずして、權門のかたはらに居るものは、深く喜ぶ事はあれども、大に樂しぶにあたはず。歎きあるときも聲をあげて泣くことなし。進退やすからず。立居につけて恐れおののくさま、たとへば雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし貧しくして、富める家の隣に居る者は朝夕、すばき姿を耻ぢて、詔ひつゝ出で入り、妻子僮僕の羨めるさま見るにも、富める家の人の、ないがしろなるけしきを聞くにも、心念々に動きて時としてやすらかならず。若し狭き地に居れば、近く炎上する時、その害を免るゝことなし。もし邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれがたし。又いき

切一功一巧	22 輕蔑せられる。	2423 たよりに、深い。	2625 奴隷。養育する。	27 恩に感じ愛におぼれる。	2928 安らかにくらすしげしも。	21 家を受けついで加茂社の社務で長明も父の後をつぎたい願なかつたが許されなかつたおちぶれて。此の世を隠れ忍ぶことが多かつたから。	5 さ家を維持するて出来ないて
-------	------------	---------------	---------------	----------------	-------------------	---	-----------------

ほひある者は、貪慾深く獨り身なる者は、人に輕しめらる。寶あれば恐れ多く、貧しければ歎き切なり。人をたのめば、身他のやつことなり、人をはごくめば、心恩愛につかはる。世に従へば身苦し又従はねば狂へるに似たり。いづれの處を占め、如何なるわざをしてか、暫しもこの身をやどし、たまゆらも心を慰むべき。

一〇 大原の閑居

我身父かたの祖母の家をつたへて、久しく彼處に住む。其の後縁かけ身おとろへて忍ぶかたがた、しげかりしかば、遂に跡とむる事を得ずして、三十餘にして、更に

庵一菴	6 假りに造つた小	7 假りに造つた小	8 前に住んでゐた	9 住居する家、お	10 附屬の建物など	11 ない。	12 あいふないさいふ	13 波の音のさわが	14 盗賊のこゝろを白	15 慢しな月日を過し	16 四季の時節の變	17 自家して浮世を
-----	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	--------	-------------	------------	-------------	-------------	------------	------------

我が心とひとつの庵を結ぶ。これを有りし住居になづらふるに、十分が一なり。唯居屋ばかりを構へてはかばかしくは屋を作るに及ばず。僅かに築地を築けりといへども門たつるにたづきなし。竹をはしらとして、車やどりとせり。雪降り風吹くごとに危ふからずしもあらず。所は川原近ければ水の難もふかく、白浪のおそれもさわがし。すべてあらぬ世を念じ過しつつ、心をなやませることは、三十餘年なり。其の間折々のたがひめに、おのづからみじかき運をさとりぬ。すなはち五十の春を迎へて家を出て世をそむけり。もとより妻子なければ捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけて

201918 捨て、隠遁した
縁者、身内の者
執着(心のこり)
山中にくらすこ
と。

池亭記
亦猶行人之
造旅宿老蚕
之成獨繭矣

1 半寄りて死期の
近づいた時。
2 晩年の住家。

蚕一蠶

3 さやかくさいふ
てるまに。

常一恒一毎に

4 次第に。

土一地一壤

5 一丈四方即十
尺平方のこと。
6 よい場所を選ん
で。

か執をとどめん。空しく大原山の雲に臥して、又五かへ
り春秋をなん經にける。

一一日野山の菴

こゝに六十の露消えがたに及びて更に末葉のやど
りを結べることあり。いはゞ旅人の一夜の宿を作り、老
いたる蠶の繭をいとなむが如し。これを中頃の住家に
なずらふれば又百分が一にだにも及ばずとかく言ふ
ほどに齡は年年にかたぶき住家はをりく⁴に狭し。其
の家のありさま世の常ならず。廣さは僅かに方丈高さ
は七尺ばかりなり。所を思ひ定めざるが故に、地をしめ

積一積一蹟

10 車賃のこと。
11 費用。
12 隠遁して。
13 此。

帳一帳

14 竹の椽側。
15 佛に水や草花を
供ふる棚。
16 アミダの肩は自
ら光を放つて
國土を照らされ
るさいふので
入日を照らすの
でたさへたので
ある。
17 幕をたれた開き
戸。
18 皮で包んで作つ
てあるはこ。
19 三四箇。
20 お經の本。

て作らず、土居をくみ打おほひをふきて、つぎめごとに
かけがねをかけたなり。もし心かなはぬ事あらばたや
すく外に移さんがためなり。其の改め作る時、いくばく
の煩ひかある。積む所わずかに二輛なり。車の力をむく¹⁰
ゆる外には更に他の用途いらす。いま日野山の奥に跡¹²
をかくして後南に假の日かくしをさし出して、竹の簣¹⁴
を敷き、その西に閑伽棚を作り中には、西の垣にそへて
阿彌陀の畫像を安置し奉り落日を受けて眉間の光と¹⁶
す。かの帳のとびらに普賢ならびに不動の像をかけた¹⁷
り。北の障子の上にもひさき棚をかまへて黒き皮籠三¹⁸
四合を置く。すなはち和歌管絃往生要集のごとき抄物²¹

箏一琴一瑟

81 扱き書きしたも
 22 種のとげたたるも
 23 藁で作った敷物
 24 今の園爐裏や火
 十鉢のこご
 1 不動明王、
 2 釋迦牟尼、
 3 普賢菩薩、
 4 地藏菩薩、
 5 彌勒菩薩、
 6 觀音菩薩、
 7 勢至菩薩、
 8 阿彌陀佛、
 9 阿彌陀佛、
 10 阿彌陀佛、
 11 阿彌陀佛、
 12 阿彌陀佛、
 13 阿彌陀佛、
 14 阿彌陀佛、
 15 阿彌陀佛、
 16 阿彌陀佛、
 17 阿彌陀佛、
 18 阿彌陀佛、
 19 阿彌陀佛、
 20 阿彌陀佛、
 21 阿彌陀佛、
 22 阿彌陀佛、
 23 阿彌陀佛、
 24 阿彌陀佛、
 25 阿彌陀佛、
 26 阿彌陀佛、
 27 阿彌陀佛、

粗日薪詩註

1 竹で水を通はす
 2 小枝のたきぎ

を入れたり傍に箏琵琶各々一張を立つ。いはゆるをり
 琴つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどろをしきつ
 かなみを敷きて夜の床とす。東の壁に窓を明けてここ
 に文机を出だせり、枕のかたに炭櫃あり。之を柴折りく
 ぶるよすがとす。庵の北に小地をしめてあばらなるひ
 め垣をかこひて園とす。すなはちもろもろの薬草をう
 るたり假の庵のありさま此の如し。

二一日野山の仙境

其の所のさまをいはば南にかけひあり。岩をたたみ
 て水をためたり。林の軒ちかければ、つま木を拾ふにと

山れみ古
 にかなるは
 につらるら
 色正木し
 つづきの外
 西をまつ
 そを紫の心
 を思はぬ雲
 一 報恩
 切 衆生
 口 生 福
 世の中は拾遺
 たのへは朝ぼ
 らのうらほに
 舟の漕ぎの白
 波のあさく

3 少くはない。不自
 4 常の面を茂草。
 5 一の生に道をつて人
 6 極浄の居をひら
 7 佛の道を開ひ
 8 藤の花は紫雲念
 9 佛の像を迎ふ
 10 佛の像を迎ふ
 11 佛の像を迎ふ
 12 佛の像を迎ふ
 13 佛の像を迎ふ
 14 佛の像を迎ふ
 15 佛の像を迎ふ
 16 佛の像を迎ふ
 17 佛の像を迎ふ
 18 佛の像を迎ふ
 19 佛の像を迎ふ
 20 佛の像を迎ふ
 21 佛の像を迎ふ
 22 佛の像を迎ふ
 23 佛の像を迎ふ
 24 佛の像を迎ふ
 25 佛の像を迎ふ
 26 佛の像を迎ふ
 27 佛の像を迎ふ

もしからず、名を外山と言ふ。正木のかづら跡を埋めり、
 谷しげけれど西は晴れたり、觀念のたよりなきにしも
 あらず。春は藤浪を見る紫雲の如くして西方にほふ。
 夏はほととぎすを聞く。かたらふ毎に死出の山路ちぎ
 る。秋はひぐらしの聲耳にみり、空蟬の世をかなしふ
 と聞ゆ。冬は雪をあはれぶ。つもり消ゆるさま罪障にた
 とへつべし。もし念佛ものうく讀經まめならざる時は
 自ら休み自ら怠るに妨ぐる人もなし。又恥づべき友も
 なし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業をさ
 めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なけ
 れば何につけてかやぶらん。もし跡の白浪に身を寄す

客陽江白樂天
風葉荻花秋送

何處新古今集
れあすも住ま
る代にしばしな

10 極楽へ行くさま
11 悔するやうに消滅
12 氣がすすまぬ
13 讀まうと思はぬ
14 自然の居るさ
15 惡業の戒め
16 山朝の國宇治
17 満馨沙彌の風流
18 桂の木を吹く風
19 秋支那の淨陽江の景色を想像し

る朝には岡の屋に行き交ふ船をながめて満沙彌が風情を盗み、もし桂の風葉をならす夕には潯陽の江を思ひやりて源都督のながれをならふ。もし餘の興あればしばし松のひびきに秋風の樂をたくへ、水の音に流水の曲をあやつる。藝はこれ拙なけれども人の耳を嬉ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて自ら心を養ふばかりなり。

一三日野山の逍遙

また麓に一つの柴の菴あり。すなはちこの山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。もし

天正天皇の養老中の人

足引壇千載水
を引分し下
そむる田居に
早苗のなり
秋の田のかり
ほつほぐみり
みあまにけり
賑ひにけり
勝地白氏文集
定主大都山
屬愛山人

20 松のひびきを聞
21 水の音を聞く
22 曲を弾く
23 心をなぐさめる
24 あそび
3 意外に違ふ
4 浅茅の花をい
5 山の草の子
6 山のふもと
7 田の餅
8 一種の餅
9 晴れわたつた
10 上りにさりつ
11 物にさりつ
12 足の上にならぬ
13 遠方まで行か
14 通つて思ふさ
15 醜つて思ふさ
16 琵琶の關に際通し

つれづれなる時は、これを友として遊びありく。かれは十六歳我は六十、其の齡は、ことの外なれども、心を慰むる事はこれ同じ。或はつばなをぬき岩なしをとる。又ぬかごを盛り、芹を摘む。或はすそわの田井にありて落穂を拾ひて、ほぐみを作る。もし日うちかなれば嶺によじのぼりてはるかに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ心を慰むるにさはりなし。あゆみ煩ひなく志遠くいたる時はこれより嶺つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて或は岩間にまうで或は石山を拜む。もしは又粟津の原を分けて蟬丸翁が跡をとぶらひ田上川を渡りて猿丸大夫が墓をたづね、

奥山に猿丸大夫の聲けなく鹿の聲はかなしきぞ
 巴東三峽巫峽長衣鳴三聲
 大井川瀬々火にひまなき篝火に
 山鳥のほろほろ思ふ母かそぞろ
 山深みなる西行かきせきの西行
 かる程に遠ざかる川路百首
 言ふ火をおもなす埋火の友のし
 なげめれば西行山深みけ近き

18 季節に應じて。
 19 みやげ物。
 20 山城國久世郡にあり。
 21 鹿のさめたまに火のさめたまに
 22 年寄りの夜中に眼のさめたまに
 23 火のさめたまに
 24 鳥のさめたまに
 25 鳥のさめたまに
 26 鳥のさめたまに
 27 鳥のさめたまに
 28 鳥のさめたまに
 29 鳥のさめたまに
 30 鳥のさめたまに
 31 鳥のさめたまに
 32 鳥のさめたまに
 33 鳥のさめたまに
 34 鳥のさめたまに
 35 鳥のさめたまに
 36 鳥のさめたまに
 37 鳥のさめたまに
 38 鳥のさめたまに
 39 鳥のさめたまに
 40 鳥のさめたまに

歸るさには折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、且は佛に奉り、且は家苞にす。もし夜しづかなれば窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの蜜はとほく眞木の鳥のかがり火にまがひ、曉の雨は自ら木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ／＼となくをききても父か母かとうたがひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても世に遠ざかる程を知る。或は埋火をかきおこして、老の寐さめの友とす。恐ろしき山ならねど、ふくろうの聲をあはれぶにつけても山中の景色折につけて盡くることなし。況んや深く思ひ、深く知られん人のためにはこれにしも限るべから

鳥の音はせで
 き鳥のこえし

28 かりそめ。
 29 自然に何かのついでに。
 30 高貴の人の。
 31 卑しい身分の人。
 32 悉く。
 33 心のない。
 34 心のどこかで。
 35 庵の内は狭いが。
 36 蟹の一種。
 37 水邊の山など。
 38 荒磯の打寄せる鳥。
 39 荒磯の打寄せる鳥。
 40 荒磯の打寄せる鳥。

ず。大方此の所に住み初めし時はあからさまと思ひしかど、今すでに五年を経たり。假の菴もやゝふる屋となりて、軒には朽葉ふかく土居に苔むせり。自ら事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やんごとなき人のかくれ給へるも、あまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。たぐひの炎上にほろびたる家、又いくそばくぞ。唯假の菴のみ、のどけくして恐れなし程せばしといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり。一身を宿すに不足なしがうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさこは荒磯に居る。則ち人を恐るゝが故なり。我又此の如し。身を知り

世を知れらば、願はずまじらはず、唯靜なるを望みとし、
愁なきを樂とす。

一四 日野山の花月

すべて世の人の住家を作るならひ、必ずしも身のた
めにはせず、或は妻子眷屬のために造り、或は親昵朋友
のために作る。或は主君師匠及び財寶牛馬のためにさ
へこれを作る。我今身のために結べり、人のために作ら
ず、ゆゑいかんとなれば、今の世のならひ、此の身のあり
さま、ともなふべき人もなく、頼むべきやつこもなし。た
とひ廣く作れりとも、誰をか宿し、誰をかすゑん。それ人

1 一家親族の皆を
こめていふ。
2 懇意な人。

3 なぜかさいふさ
今の世の人情や
風俗や、又自分
の有様を考へて
見るに。
4 妻や眷屬。
5 召使ひ。
6 据え置かう。
7

8 表面は自分に親
切にしてくれる

9 つかれて、から
だかだるくはな
らぬけれども、な
らぬの氣兼ねする
よりの氣兼ねする

11 手はやつこの用
をなし。

の友たるものは富めるをたふとび、ねんごろなるを先
とす。必ずしも情あると、直なるとをば愛せず。唯糸竹花
月を友とせんにはしかず。人の奴たるものは、賞罰の甚
しきをかへりみ、恩のあつきを重くす。更にはこくみあ
はれぶといへども、安く靜かなるをば願はず。唯我が身
を奴婢とするにはしかず。もしなすべき事、あれば則ち
自ら身をつかふ。たゆみならずしもあらねど、人をしたが
へ、人¹⁰をかへりみるよりは、やすし。もしありくべき事あ
れば、自らあゆむ。苦しといへども、馬鞍牛車と心を惱ま
すには似ず。今一身を分ちて二の用をなす。手¹¹のやつこ
足の乗物、よく我が心になへり。心又身の苦しみを知

- 12 丈夫な時はつかふ。
- 13 度々使つて度を過ぎやうなことはない。
- 14 心ないらくさ
- 15 身を保ち、生を全ふする。
- 16 空しく。

- 1 藤の皮のすじて織つた粗末な布。
- 2 麻の衣具。

- 3 粗末でも。
- 8 おいしく食べる。

れば、苦しむ時はやすめつ、¹²まめなる時はつかふ。つかふととも、¹³たびくすぐさず。ものうしととも、¹⁴心を動かす事なし。いかにいはんや。常にありき、常に働くは、¹⁵これ養生なるべし。何ぞいたずらにやすみ居らん。人を苦め、人を悩ますは又罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

一五 日野山の浮雲

衣食のたぐひ又同じ。藤¹の衣、麻²の衾、得るにしたがひて肌をかくし、野邊のつばな、峯の木の實、僅に命を繫³ぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を耻づる悔もなし。糧⁴乏しければ、おろそかなれども、猶味をあまくす。すべ

枕一沈 華嚴經
三界唯一心
心外無別法
是心無差別

寂一淋

莊子秋永篇
子非魚安知魚之樂

- 5 此の世に何の怨もみなく我が心もやすらかである。
- 6 壽命。
- 7 不足さと思はな
- 8 一生涯の中の最上の樂。
- 9 うたれたの時のうつらほし
- 10 四季おり／＼の美景が一番だ
- 11 欲界の色界、無色界のこゝでつまり此の世さいふこゝ
- 12 心がけ一つである
- 13 自然
- 14 自然
- 15 他欲界の人が浮世に執着してゐるのをあはれに思ふ。

て、かやうのこと、楽しく富める人に對していふにあらざ。唯我身一つにとりて昔と今とをたくらぶるばかりなり。大方世を遁れ、身をすてしより、⁵うらみもなく、をそれもなし、命は天運にまかせて、惜まず。いとはず身をば浮雲になすらへて、たのまず⁷まだしとせず。一期⁸のたのしびは、⁹うたゝねの枕の上にはまり、生涯の望みは、をりく¹⁰の美景に残れり。それ¹¹三界は唯心¹²一つなり。心もしやすからずば牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望みなし。今寂しき住居一間の菴自ら是を愛す¹⁴自ら都に出でては、乞食となれることを恥づといへども、かへりてこゝに居るときは、¹⁵他の俗塵に着することをあはれぶ。

いはつて世までも
まはらぬ山の上
さかすまのいづ
かかるともその
さかすまのいづ
だのくもその
さかすまのいづ
いぬの光を仰ぎ
た絶憾に

月かけは入る山の端もつらかりき

たえぬひかりはみるよしもがな

一

よどみ
うたかた
玉敷の
いらか
假の宿
無常

三

辻風
檜皮葺
業風
かばかり
片羽づく
物のさとし

五

條理
内裏
木丸殿
せきあへず
衣冠布衣直垂
瑞相

二

末廣
現心
辛くして
七珍
公卿
さしも

四

水無月
官位
蔭を頼む
あまされる
所領
庄園

六

あさまし
五穀
ぞめき
なべてならぬ
さのみやは
目みたつる

七の一

あまさへ
えやみ
築地のつら
わびしれたる者
賤山かつ
あやし

八の一

な
あ
まろぶ
立ど
堂舎塔廟
ひしげる
覚え侍る

九の一

みぐし
いみじ
あぢきなし
權門
すぼき姿
ないがしろ

七の二

かたらふ
……かよ
結縁
阿の字
いかにいはんや
めづらかに

八の二

おほひ
はかなし
跡なしごと
いとほし
餘波
四大種

九の二

念々
輕しめらる
やつこ
恩愛
はこくむ
たまゆら

十

居屋
はかくし
たつき
世をそむく
よすが
執

十一の一

とかく云ふ
土居
日かくし
竹の簀
閑伽棚
眉間の光

十二の一

皮籠
抄物
ほどろ
つかなみ
炭櫃
ひめ垣

十二の一

かけひ
つま木
正木のかづら
観念のたより
藤浪
空蟬

十三の一

罪障
まめ
口業
禁戒
跡の白浪
餘興

十三の一

つれづれ
ほぐみ
すそわの田井
さはりなし
家苞
ましら

十三の二

かせぎ

埋火

老の寝ざめ

あからさま

やんごとなき

敷ならぬ

十三の三

つばな

岩なし

ぬかこ

ふくろう

がうな

みさご

十四

眷屬

親昵

故如何となれば

今の世のならひ

たゆし

いたづらに

十五の一

藤の衣

麻の衾

かて

おろそか

あまし

なずらふ

十五の二

まだしとせず

一期のたのしび

うたたね

三界

よしなし

閑居の氣味

十六

三途の闇

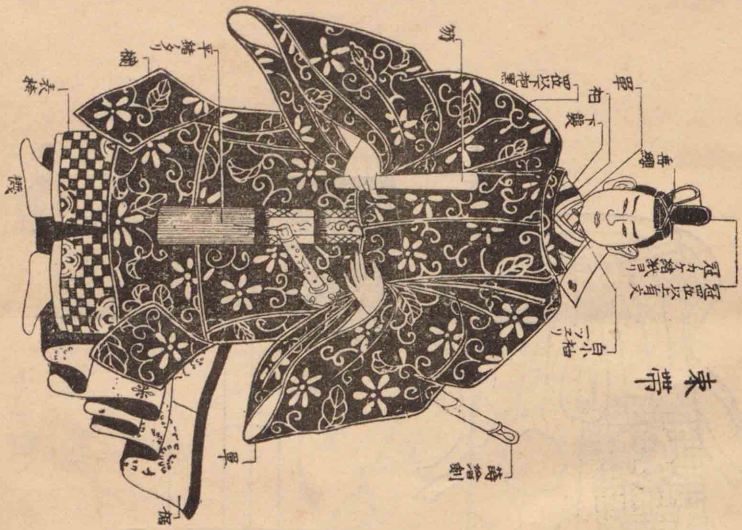
とが

けがす

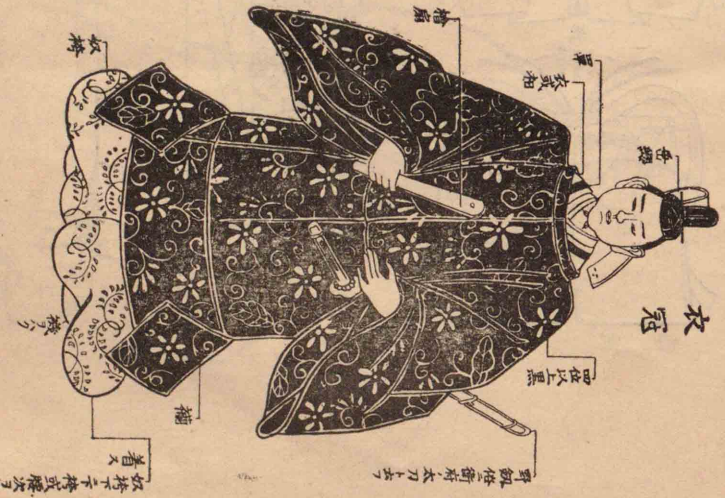
妄心

不請の念佛

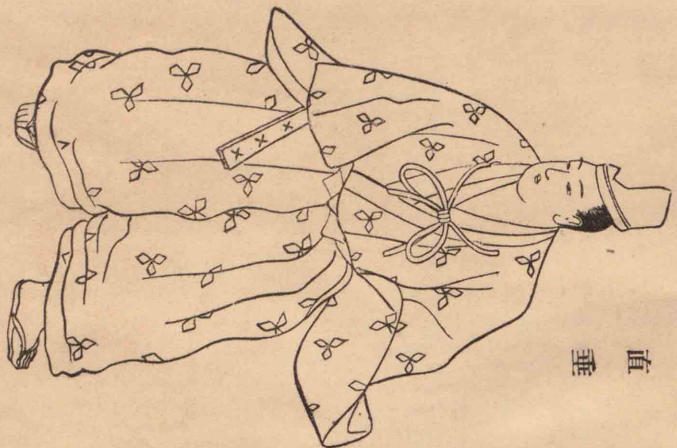
桑門



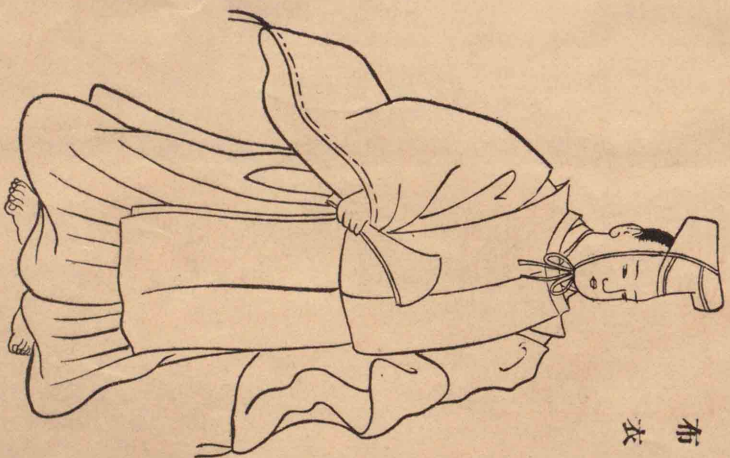
束帯



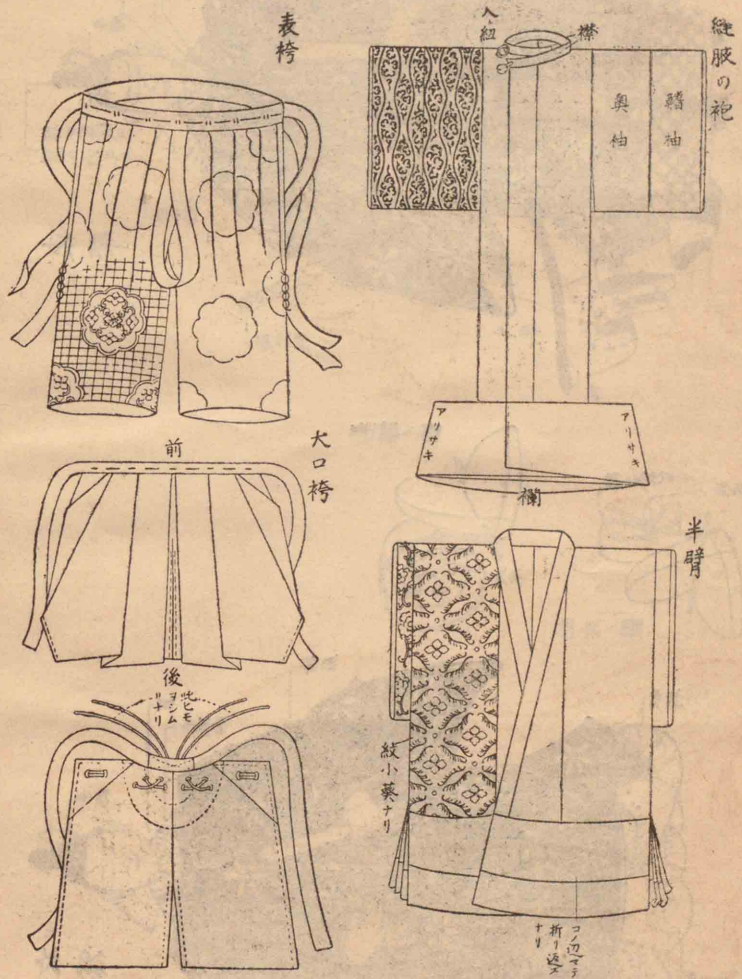
衣冠



直垂



布衣



表袴

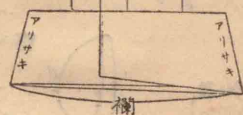
縫肢の袍

奥袖

襟

入紐

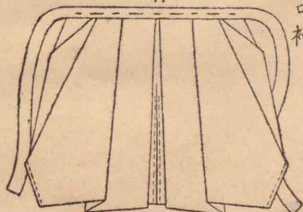
襟



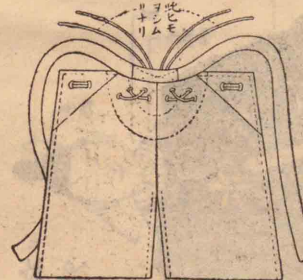
裾

前

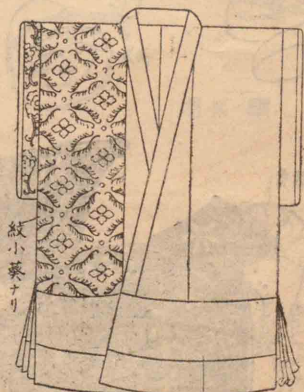
大口袴



後

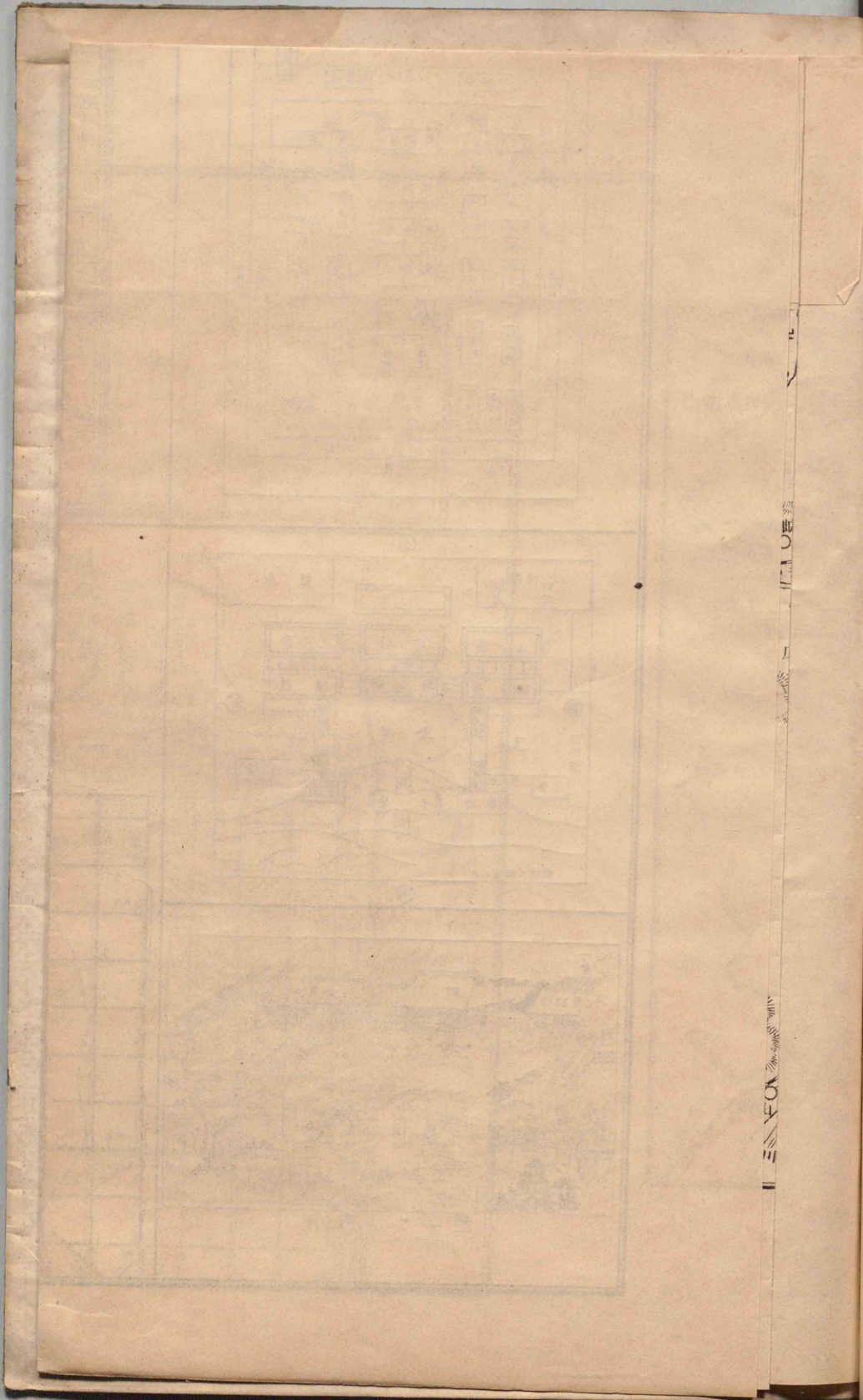


半臂

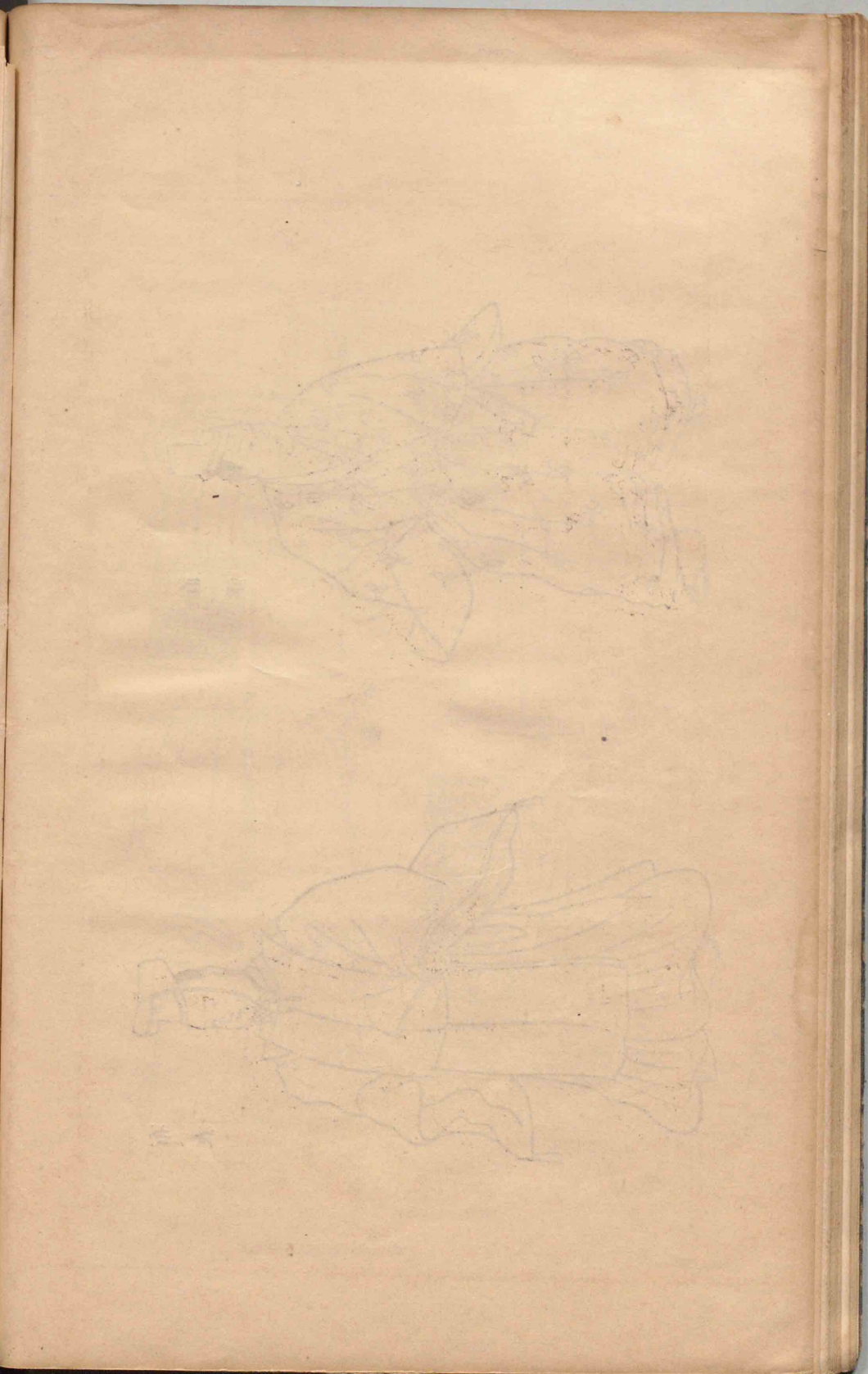


紋小英ナリ

折り返し



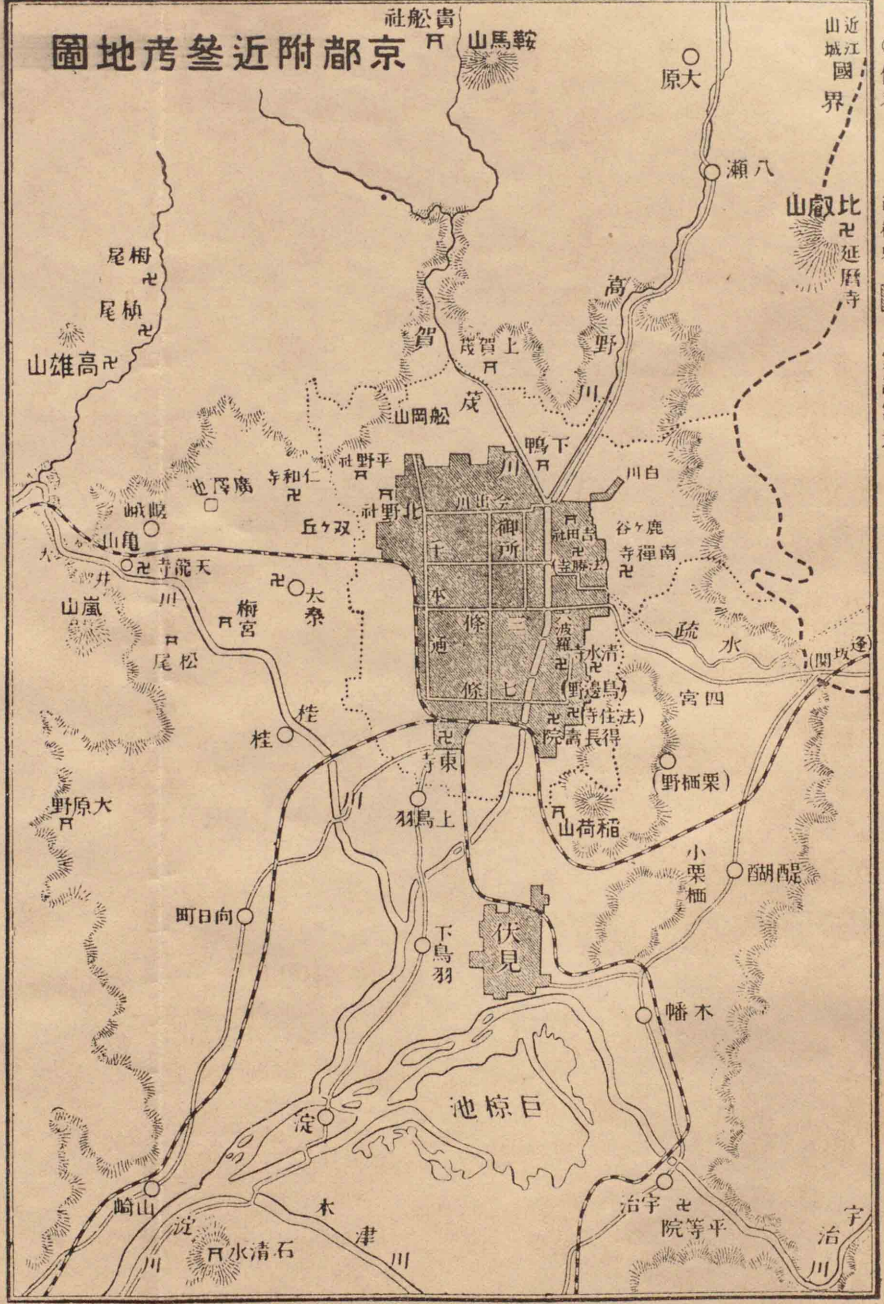
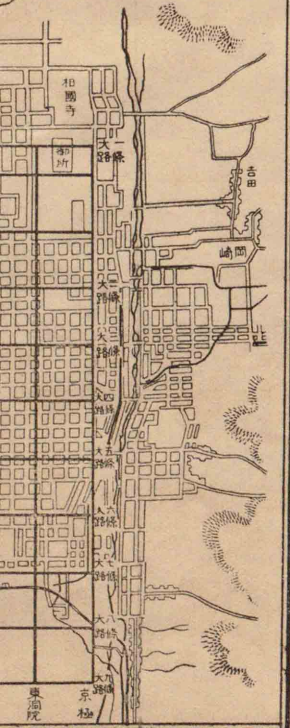
PLAN OF THE HOUSE



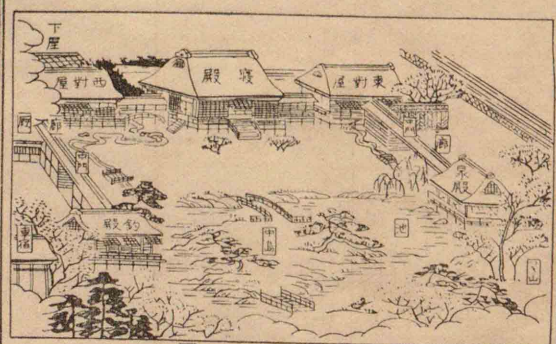
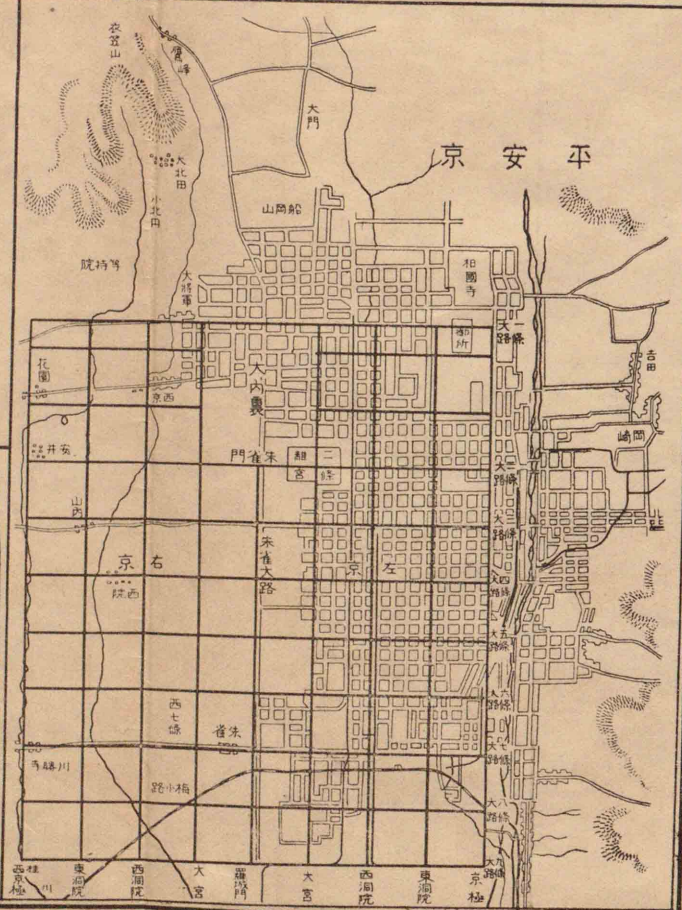
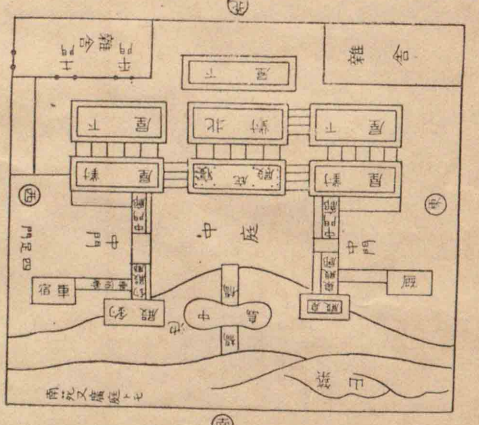
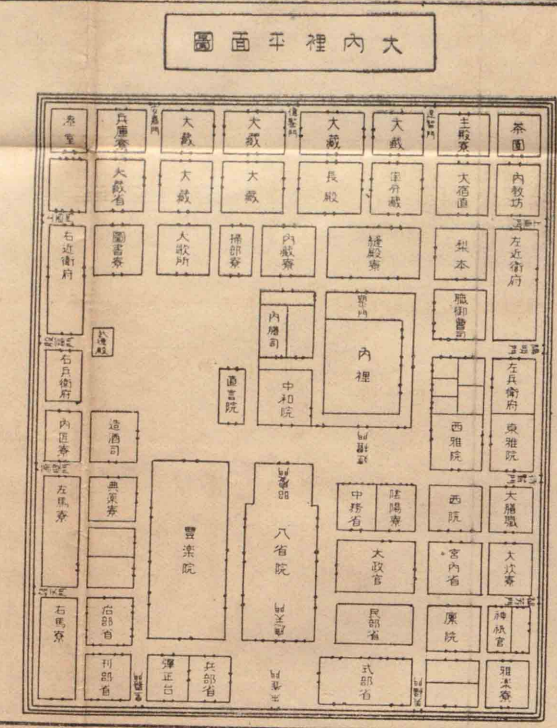
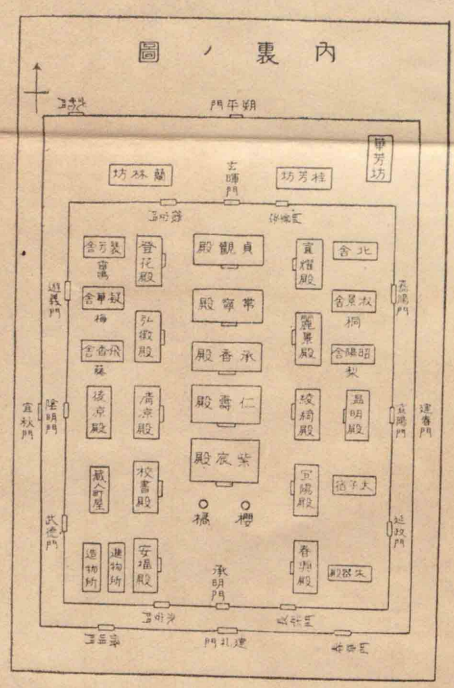
内大

茶園	内教坊	左近衛府	左近衛府	東院	大藏
大藏	大内	堀本	堀本	西院	大藏
主計	主計	堀本	堀本	西院	大藏
堀本	堀本	堀本	堀本	西院	大藏
堀本	堀本	堀本	堀本	西院	大藏
堀本	堀本	堀本	堀本	西院	大藏
堀本	堀本	堀本	堀本	西院	大藏
堀本	堀本	堀本	堀本	西院	大藏
堀本	堀本	堀本	堀本	西院	大藏
堀本	堀本	堀本	堀本	西院	大藏

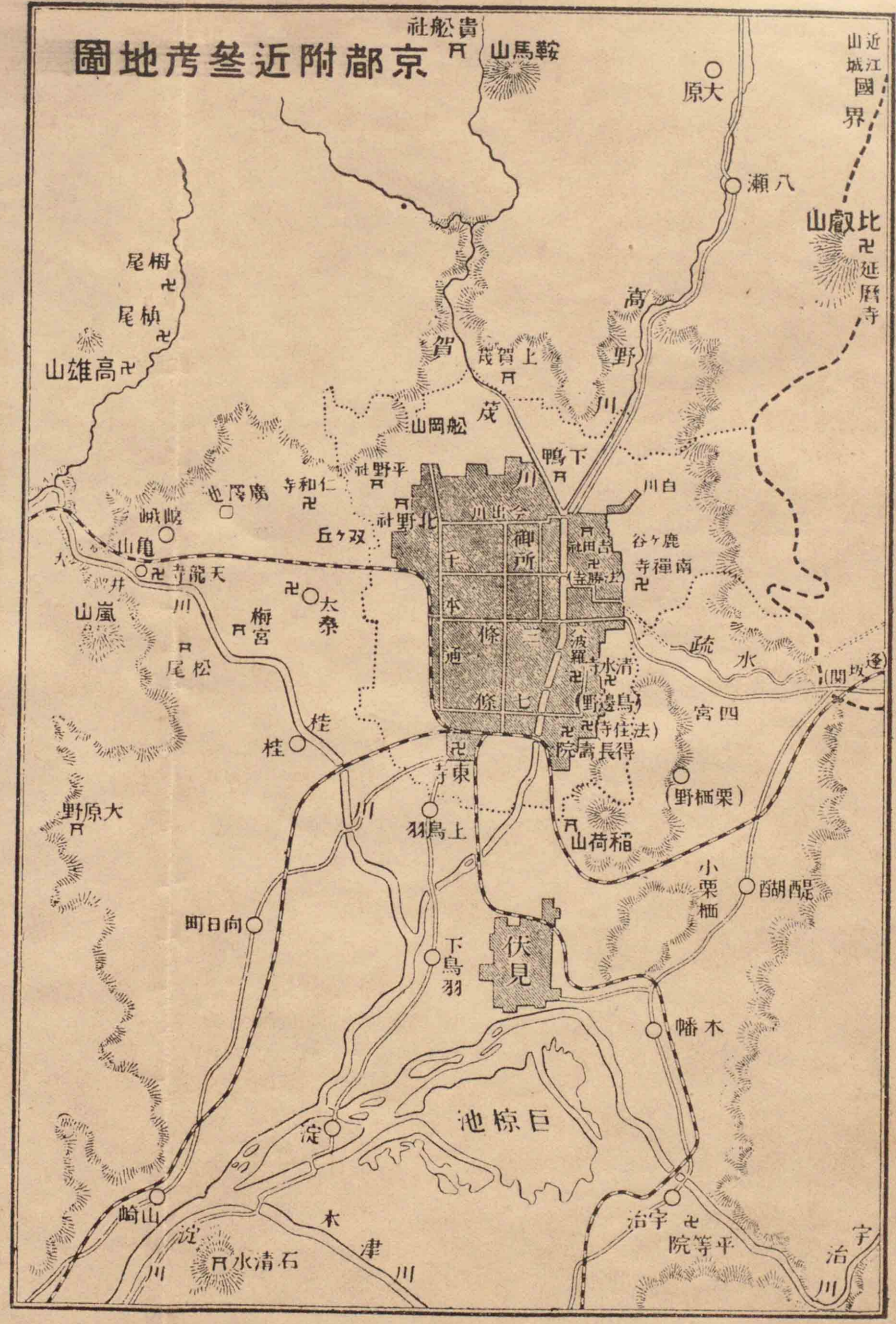
京安平



備考
 市郡界
 ■ 人家稠密地

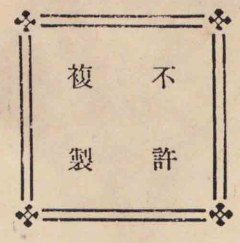


圖ノリ造殿寢



大正十五年六月五日印刷
大正十五年六月十日發行

定價金參拾錢



本讀記丈方

編者 修文館編輯部

發行者兼印刷者 鈴木常次郎

發行者 鈴木常松

發行所

東京市神田區表神保町二番地
振替東京(二六四四番)
大阪市東區博勞町五丁目
振替大阪(四七一番)

修文館

